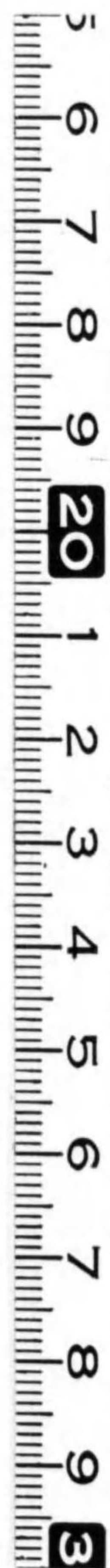


文貞公歌集

67-471

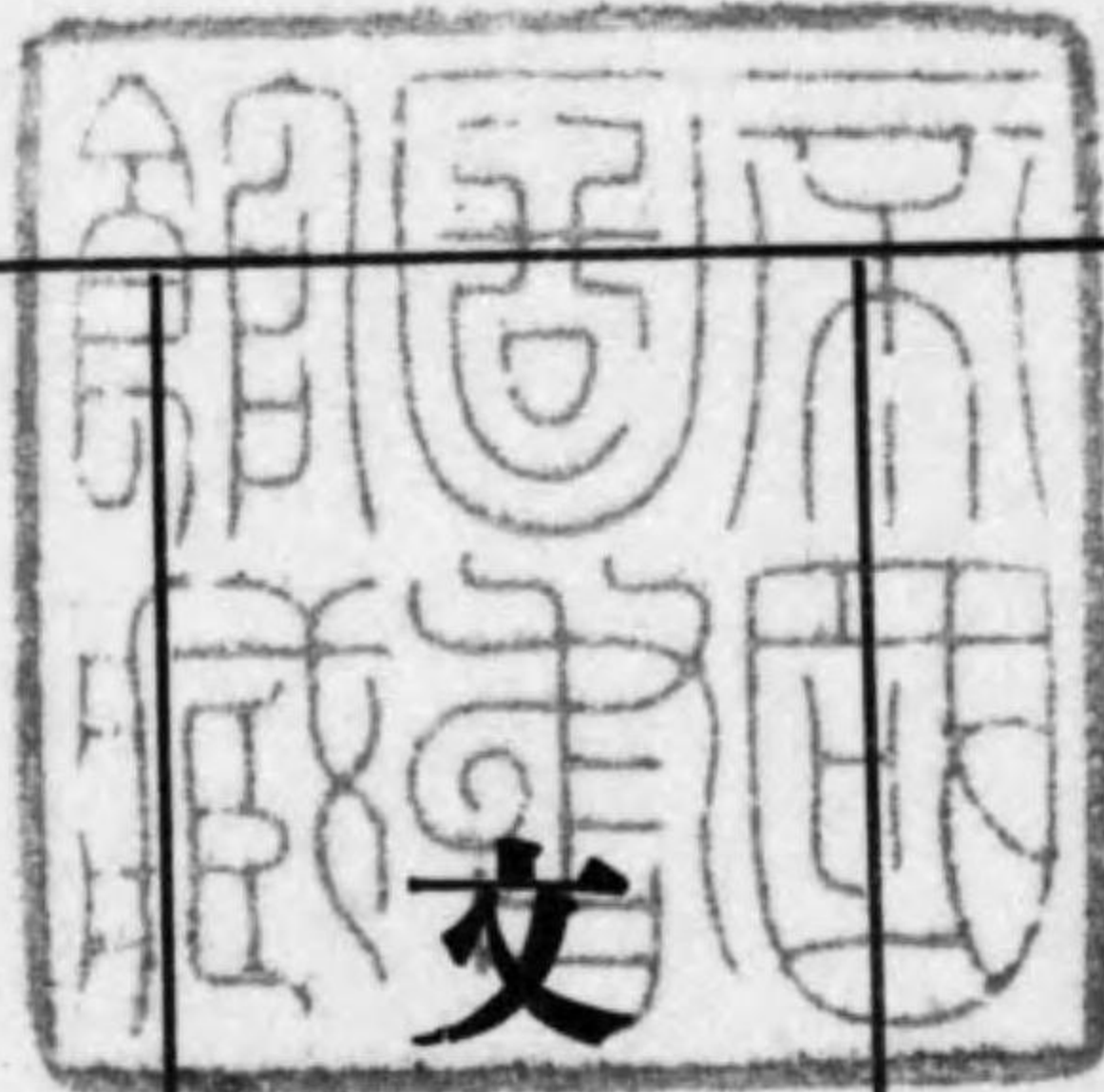


1200501281679



始





小御門叢書 第一

貞女
貞公歌集

小御門神社藏版



序

畏くも後醍醐天皇より文貞公の謚號を賜はりし、藤原師賢公は寔に臣子の龜鑑と謂ひつべし。公の御生涯は僅に三十二年の短き歳月に過ぎざりしが、その間君國の爲に粉骨碎身、慨然として大義を倡へられし御事蹟は千載の下、なほ人心を激勵し義氣を鼓動するものあり。公の節に殉ぜられしより茲に六百年、その偉勳赫々たる御生涯は、殊に今日の非常時局に當りいと、其光彩を放つものあるを覺ゆ。されど、今顧みて公の純忠至誠なりし臣節の高く顯揚せられしに比し、公の高潔崇大なる御人格の未だあまねく、世に知られざるの恨なしとせず。而してかゝる遺憾なからしめむには、公が日夕吟詠し給ひし、詞藻を發表して、世人をして、直接、公のうるはしき御風懷に觸れしめむこそ最適の方法なるべけれ。こたび小御門神社に於て、御祭神文貞公の御事蹟を顯彰せんが爲に、小御門叢書を刊行せんとして、先づ此の文貞公歌集を第一編として出したるは、蓋し至當の事といふべき也。

公の歌集、曩に出版せられたる冊子ありしも、はや世に絶えて久しきを経たり。今や、そ

れに漏れたるを補ひ、謬れるを正し、從來知られざりし斷簡零墨をも求めて之を加へ、ほゞ公の歌集の全貌に近きものを髣髴せしめ得たるはいかで悦ばしからざるむ。

謹みて文貞公歌集を一讀するに、當年の和歌、おほむね辭意共に千篇一律、徒らに花鳥風月の媒とせるもの多かりし中に在りて、公の歌、いづれか感溢れ情熱せざるはなく、或は君を思ひ、國を憂ひ、或は世を歎き、身を悲み、精忠雄節、行墨の間に溢れて、洵に一字一淚見るものをして感奮措く能はざらしむるものあり。更に博く、世に探りなば、義膽なる公のこの種の玉詠、なほ蒐め得らるゝの期あらむも、とにかく今爰に此の文貞公歌集の公にせられ、公の清冽高邁なる御天資を洽く天下に知らするの機縁を作りたるは、確に公の世道人心に貢献するところ甚大なるものあるを信じて疑はざるなり。聊か所懐の一端を述べて、序をなしたるになむ。

昭和十一年五月

宮内省御歌所寄人 武島 又次郎

例言

- 一、小御門叢書は、元弘の忠臣贈太政大臣藤原文貞公に關する文献の散逸を惜み、是を蒐集し、逐次刊行以て公の偉烈を顯彰し奉るの資に供せん心意に出づ。
- 一、叢書刊行の心意に基づき、内容の尊貴を保たしむると共に讀者携帶の便を考慮し装釘を施せり。乃ち専ら楠瀬日年氏を煩はす。
- 一、叢書第一に公の詠草を收む、言々句々悉く肺肝を披瀝し、至誠純情の御人格を示されし第一のものなるが故なり。而して此の書は先に上梓せられしも、既に頒ち盡したると、内容に幾多の遺漏ありたるを以て茲に増補改版せり。
- 一、詠草は典籍の外、流布の遺墨にも亦是を求めたり。之に關しては猪熊信男氏、森繁夫氏等の援助を蒙れり、尙参考典籍は左記の諸書なり。
臨永和歌集、續現葉和歌集、續千載和歌集、續後拾遺和歌集、新千載和歌集、新拾遺和歌集、新後拾遺和歌集、新續古今和歌集、新葉和歌集、藤葉和歌集、増鏡、櫻

雲記、古手鑑帖等なり。

一、編纂の様式は四季歌、離別歌、釋旅歌、戀歌、雜歌、哀傷歌に分ち、各出典、引據並に参考記事等を菴頭に掲げたり。

一、茲に收むるもの、外、公の詠草は尙幾首かあるを信ず、得れば是を補し時機を俟つて改版するあるを期す。

昭和十一年六月二十九日

別格官幣社小御門神社宮司識

文貞公歌集目次

文貞公芳翰（短冊）……………	
四季歌（二十三首）……………	一
離別歌（六首）……………	九
釋旅歌（六首）……………	三
戀歌（二十一首）……………	一五
雜歌（三十五首）……………	三
哀傷歌（三首）……………	三五

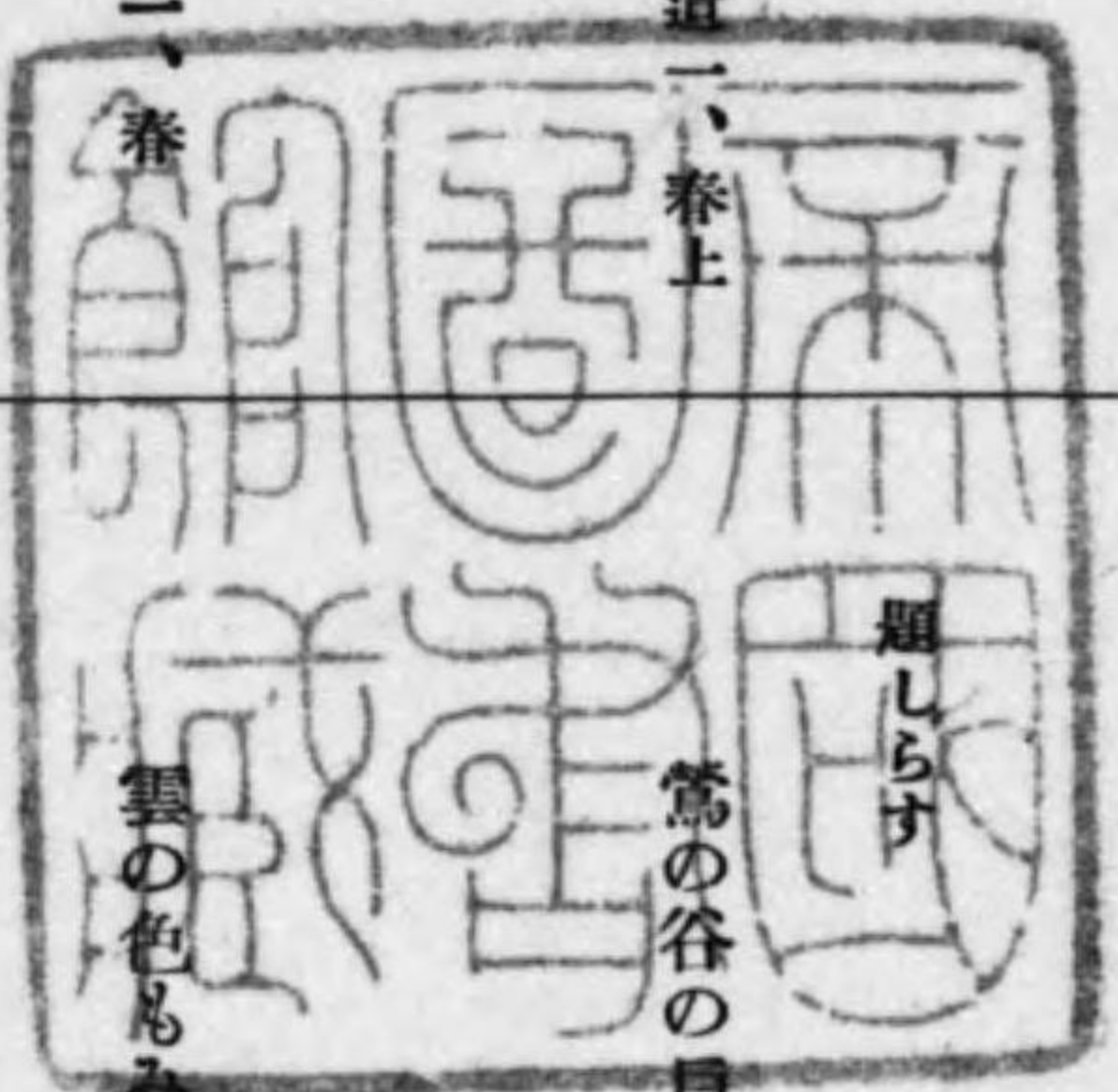
文貞公芳翰

春

春の風はさかづき
柳の葉はかぜに
吹かす

森繁夫氏所藏

四季歌



新拾遺一、春上

臨永一、春

鶯の谷の戸いてしあしたよりとやまの霞たゝぬ日もなし

雲の色もみな白妙のゆふたすき手向の山は花さかりかも

續現葉二、春下

按察使(親房)家の詩歌合に春曉

たかさこのおのへの花もかすむまに昔をのこすあり明の月

百首歌讀み侍りける中に藤を

新葉二、春下

よゝかけて絶しとそ思ふ春の日のひかりにあたる北の藤浪

春來從東

橋本實麗卿筆歌十七首

吾妻路はなこそその關もあるものをいかてか春の越てきつらむ

大阪・森繁夫氏所藏短冊

春

しらつゆのみたれていろのまさるより風におしまぬ青柳のいと

京都・小笹喜三氏所藏短冊

春

こゝろをは花こそさそへ山さくらともに見むともいふ人のなき

河野笑堂氏所藏短冊

春

をりよくももえいつるかな宮古人こととふ山の庭のさわらひ

桑名・竹内文平氏
所藏短冊

藤葉二、夏

新葉三、夏

春

身の春のはなとはいつかみかさ山神にいのりて猶やまたまし

郭公を

人つてになくともきかし時鳥我身にもらす初音ならすは

夏の歌の中に

やまのはに霞も霧に立そはぬ月のさかりは夏の夜のそら

續後拾遺四、秋上

新葉五、秋下

新千載、秋上

百首歌奉し時

七夕の秋の一夜の契こそけに偽のなき世なりけれ

題しらす

浮雲の残らぬ空にすむ月は行とも見えて夜半そ更ぬる

野草花といへることをよめる

白露のおくとみしより咲花のいろの千種に野はなりにけり

續後拾遺五、秋下

百首歌奉し時

白つゆも時雨も色にあらなくにそめて千しほの衣手の杜

秋の歌の中に

新葉五、秋下

風さむみ秋たけゆけは露霜のふるの山へは色つきにけり

元亨三年七月内裏にて三首歌講せられける時初秋月といへる事を右衛門督にてつかうまつりける

新千載四、秋上

雲の上の月もいくよかなれぬらん秋くるかたのとのへもる身に

臨永二、秋

里のあまの絶す汐やく浦にたにすめはすみ鬼秋のよの月

秋

浦井安國著、たにさくつめ

ゆく月の影もとまらぬいは戸山あさの關守あきはすへなん

元弘二年百首歌の中に

新葉六、冬

つかふとてまつふみわけし九重の雲井のにはの雪の曙

續現葉六、冬

古筆御手鑑帖

池田書畫同好會所
藏短冊

冬

風さゆるよはのみなとの浦千鳥あとをは霜にのこしてそたつ

冬

あかつきのねさめの空のむら時雨いくさと人の袖ぬらすらむ

浦風にたちゐなれゆくさ夜千鳥しほのみちひのうちや知らん



離別歌

あつまの方へ下り侍りける時、きぬを女のもとへつかはすとて

里のあまのしほなれ衣しのへとてからき別のかたみにそやる

返し

北の方

里の蚤の潮なれ衣留めてもなからへはこそかたみとも見め

新葉七、離別
櫻雲、上
路次にて絹を女
のもとへ遣すと
て云々
新葉七、離別
櫻雲、上
北の方は新葉集
に妙光寺内大臣
母とあり、妙光
寺内大臣は文貞
公男家賢卿なり

新葉七、離別
櫻雲、上

又たき薫ものをつかはして是をたかはかならす夢になむみゆへきよしを申おくりてつゝみ紙にかき付侍りける

なれくし夜半のうつり香忘れすは煙にそはむ面影も哉

後にこれをたきてねける夜はかならす夢にみてけりとなむ

尾張國をすくるとて都なる人のもとへ申しつかはしける

海山をみる空もなしわか心さなから君にそへて來しかは

新葉七、離別
異本來ぬれは

元弘二年百首歌よみて中務卿尊良親王のもとへつかはしけるつゝみ紙にかきつけ侍りける

かたみとて残す水くきあとたゆな忘ぬなかのめぐりあふまで

新葉七、離別

新葉七、離別

文貞公あつまの方へおもむき侍りける時おなしやうにくたりける人々みちにてあまたうせ侍りけるよしつたへきよてよめる 北の方

廻りあふちきりならすは中中にうきをみはてぬ命ともかな

羈 旅 歌

おなし(羈旅)心を

あけぬとて關路こえ行たひ人の袖吹をくるすまのうらかせ

元弘二年世のみたれによりて、しもつふさの國にうつされ侍りける時、尾張國より都なる人のもとへ申しつかはしける

けふまてはありときゝても頼むなよ猶行末もしらぬ命に

續現葉七、羈旅

新葉八、羈旅

新葉八、羈旅
櫻雲、上
異本鳥の名きく
も昔

墨田川のほとりにてよみはへりける

こと問ていさゝはこゝにすみ田川鳥の名きくも都なりけり

下總國にて月をみて讀み侍りける

故郷のおなし空とは思ひ出しかたみの月のくもりもそする

新葉八、羈旅
櫻雲、上

下つふさの國に侍りける時三十一首歌讀みて上下おきけるおなし文字なき
うた

東路やとこよの外に旅寝してうき身はさそな思ふ行末

新葉八、羈旅

新葉八、罽旅

夢のよにけふ生れきて悔しさも一方ならず身を耻る比

戀 歌

百首歌よみ侍りける中に初戀

人やりの道とはしらぬ戀の山わかこゝろよりまよひそめつゝ

戀の歌の中に

身をかへは忘もそする同し世につらき報いをいかて知らせむ

新葉十二、戀二

新葉十一、戀一

新葉十二、戀二

むくいとて我つらからは後の世も又や逢ひ見ぬ中と成なむ

正中二年百首歌奉りける時

新千載十一、戀二

誰故に思ひ入にし戀路とて人の心はかよはさるらん

題しらす

新葉十二、戀二

ためしなくなけかむ爲の報い哉つらさにまけぬ心つよさは

新葉十三、戀三

いかなる時にか女のもとへつかはしける

一夜たにくやしといひし曉のとりかさねつる空のかなしさ

題しらす

新千載十二、戀二

戀しぬといひてもさのみなからへは何をか後のことの葉にせん

百首歌の中に後朝戀を

新葉十三、戀三
異本見えけむ

別つるおも影なからまどろめはさそな又ねの夢も見えける

新葉十四、戀四

百首歌の中に逢不逢戀を

今更に名こそその關をあふ坂の山のあなたに誰かすゑけむ

新葉十四、戀四

又も見ぬ闇のうつゝの通ひ路はなになか／＼の夢の浮橋

新拾遺十一、戀一

題不知

せきかへす袖の涙の玉かつらかけてもしらし色も見えねは

新後拾遺十三、戀三

正中二年百首歌奉けるとき

其まゝにやかて命も絶ぬへしけに身にかふる逢せなりせは

新葉十四、戀四

寄源氏物語といふ事を

玉かつらかけてそしのふ夕顔の露あかさし花の形見に

新葉十五、戀五

戀歌の中に

我方に藻鹽たるともしらてこそこと浦人のみるめかるらん

新拾遺十四、戀四

寄夢戀

明るをもまたぬ契のかなしきはあふとみる夜の夢の別ち

百首歌奉し時

續後拾遺十四、戀四

いたつらに月日そこゆる鳥の音のうかりしまゝの逢坂の關

題不知

續千載十五、戀五

恨みわひかゝるとたにもしらせはやつらさにたへぬ袖の泪を

藤葉六、戀六

戀の歌の中に

さても又いかにちきりてすゑの松うき年なみのさのみこゆらん

元亨四年五月内裏にて題をさくりて人々哥つかふまつりけるき顯戀

臨詠、六

なみたせく袖と共に朽もせてまつ世にもるやうきな成らん

臨詠、六

誰ゆへに思ひ入にしこひちとて人の心のかよはさるらん

臨詠、七

元亨四年二月内裏にて人々題をさくりて哥つかうまつりけるに同し心を
山のはを出へき月のかけなくはなによそへて人をまたまし

新續古今二十、神
祇

臨詠、一

雑歌

神祇の歌の中に

くもりなき君か心のかゝみにそあまてる神はかけやとしける

元亨四年二月内裏にて十首の歌こうせられける時歸雁

いにしへにかへる都の花の色をこしちにつけよかりの玉札

増鏡春の別
 御門ことの外
 てせ給て續後
 拾遺とそいふな
 る、中宮太夫師
 賢うけたまはり
 てこのたひの集
 のいみじきよし
 さまさまおほせ
 つかはしたるに
 云々
 新千載十七、雜上、
 續後拾遺撰て奉
 りける時集のさ
 ま昔にはちぬよ
 し仰ことありし
 かは、大納言師賢
 につけて奏せさ
 せ侍し
 前大納言爲定
 今そしるあつめ
 し玉のかすへ
 き身をてらすへ
 御返しありとは
 後醍醐院御製か
 すくにあつむ
 る玉のくもらね
 はこれをも我世の
 光とそなる、雜上
 新千載十七、雜上

續後拾遺和歌集の撰はれける時兵衛督爲定のもとへいひやりける

和歌の浦の浪もむかしにかへりぬと人よりさきにきくそ嬉しき

返し

兵衛督爲定

わかぬ浦や昔にかへる浪そともかよふ心にまつそきくらむ

正中二年百首歌奉りける時

河上の丹生の袖人心せよみしかき木をも捨ぬならひを

新葉十六、雜上
 書道全集、第六
 冊三重縣某氏所有短

春の歌の中に

うれへあれは聞事いとふ我身ともしらてやこゝに鶯の鳴く

松避年友詠

かきりなくちきは千代をかさねてよ我友かほのきの松かえ

ひさ方のあまりはるけき君か代にめくる月日をいかゝかそへん

新葉十六、雜上

元弘二年百首歌讀侍ける中にこそ春、内裏にて雪の山つくられて御あそひなとありし事を思出て春雪をよめる

百敷や都のふしとみし雪のやます戀しきはるの面影

元弘二年の春かりそめに侍りける所にて讀み侍ける歌の中に歸雁を

歸るかりおなし都のほとたにも我か玉つさを君につてなむ

新葉十六、雜上

元弘二年の春百首歌讀侍ける中にくるゝ春の心を

惜みこし春にや今年慕はれん彌生の末も待ぬ身ならば

新葉十六、雜上

新葉十六、雜上

下つふきの國にて七夕七首歌讀み侍りける中に

そむく身は梶の七葉も書絶えてけふ手に取ぬ草の上の露

新葉十六、雜上

棚機にけふこそ獨かこつらめはねをならへしふるき契を

増鏡むら時雨
新葉十六、雜上
元弘元年八月行

都へまきれおはすとて夜ふかく志賀の浦を過ぎ給ふに有明の月くまなく澄わたりて寄せかへる浪の音も淋しきに松吹く風の身にしみたるさへとりあつめ心細し

思ふ事なくても見ましほの〜と有明の月の志賀の浦浪

その後辛して笠置へは辿り參られける

幸成ぬとて後
山にのぼりたり
けるに湖上の有
明ことにおもし
ろくはへりけれ

櫻雲、上
新葉十六、雑上

同し比の事にや
有けむある野原
の中にて夜をあ
かしけるに秋の
末つかたなれは
虫の聲々きほひ
云々

新葉十六、雑上
異本かけよわる

新葉十六、雑上

下つふきの國に侍りけるころ虫のこゑくきほひなくをきゝて思ひつゝ侍りける

古は露わけわひし虫のねを尋ねぬ草の枕にそきく

思のほかなる所に侍りける時、從三位師子いたうおもひ歎くよしを聞てよめる

かけよはるは、その紅葉いかならんこの下道のあれはてしより

百首歌の中に

夢ならて又やはみむと悲しきは豊のあかりの夜半の月影

新葉十六、雑上

花山院贈太政大臣百首歌讀みておくりたりける返事に

中務卿尊良親王

戀さもいかにせよとて若の浦に馴し千鳥の跡をみす覽

返し

君たにも戀なるわか友千鳥いかにねをなく恨とかしる

題しらす

むへしこそ雪も深けれなへて世のうれへの雲のそらにみちつゝ

新葉十六、雑上

新葉十六、雑上

新葉十七、雑中

世をのかれて後百首歌讀み侍ける時曉を

今よりは佛の道にいそくなつかへなれにし鳥のはつ音を

夕を

古はいかゝ聞きし身をせむる入相の鐘の夕暮の空

新葉十七、雑中

元弘二年の春中務卿尊良親王のもとより歌よみておくりて侍りける返事に

かき暮す泪のひまのあらはこそ定かにも見ぬ君か言の葉

新葉十七、雑中

櫻雲、上
新葉十七、雑中
仁和寺門跡誌
南方紀傳
あらしにも

元弘元年北長尾の山庵にこもり居侍けるを世のみたれによりてかしこをも
又立出て後讀み侍ける歌の中に

いほ結ふ山の下柴をり／＼のあらましに似ぬ身の行へ哉

思ひかね入にし山をたち出てまよふうき世もたゝ君のため

櫻雲、上
新葉十七、雑中

しもつふきのくにへくたり侍ける道にて三嶋大明神によみて奉りける歌中に

契ありてけふは三嶋のみたらしにうき影うつす墨染の袖

櫻雲、上
新葉十八、雑下

櫻雲、上
新葉十八、雑下
仁和寺門跡誌
北長尾の山莊に
て云々

櫻雲、上
新葉十八、雑下

新葉十八、雑下

世をそむきて後、春宮大夫師兼のもとへ申しつかはしける

更にまた住わふる身を歎くこそ捨てもおなし憂世なりけれ

返し

師 兼

さらに又歎くと聞けばかくはかりいとはしき世も捨そわつらふ

出家の後百首歌讀み侍ける中に迷懷の心を

いときなき此世をかけて捨る身を獨そむくと君や知るらむ

元弘二年五月十日あまりに都をいて、下總國へ下りける時

別ともなにかなけかむ君すまてうきふるさと、なれる都を

今はかきりの對面たにゆるされねはよろつに心うく思ひめぐらされて

北の方

いまはとていのちをかきる別路は後の世ならていつを頼まむ

しもつふさのくに、おもむき侍りける時あはた口の山庄をすくとて思つゝ
け侍りける

このさとにみゆきせし世の面影そけふは泪と共に先たつ

新葉十八、雑下
櫻雲、上
師賢も下總千葉
に配流す栗田口
ての山庄を過ると

増鏡くめのさら山

増鏡くめのさら山

新葉十八、雜下
異本忘れぬ

新葉十八、雜下

久邇宮多嘉王殿下
御藏短冊

題しらす

よしやその折ノゝことの思ひ出も忘れぬ今はかゝる憂身に

百首歌の中に

夢に夢さても現に見なさはやあるにもあらず移り行く世を

千鳥

氷のし汀やさむき聞まゝに千鳥なきたつさほの川浪

新葉十九、哀傷
白氏長慶集
往事渺茫都似夢
舊遊零落半歸泉

櫻雲、上
新葉十九、哀傷
南方紀傳
十月廿九日師賢
於配所薨辭世云
異木けふの我心
かな

哀傷歌

舊遊零落半歸泉といふ事を讀み侍りける

みし人のなかはゝかへる泉河おくるゝ浪もあはれいつまで

下總國に侍りける比、神な月の末つかたやまひおもく成りて今はかきりと
おほえけるに思つゝ侍りける

雲の色に時雨雪けは見えわかつて只かきくらすけふの空哉

新葉十九、哀傷
櫻雲、上
異木われや、

しての山こえむもしらて都人猶さりともとわれをまつらむ

かくて次の日身まかりにけりとなむ

昭和十一年七月五日印刷
昭和十一年七月十日發行

(非賣品)

不許
複製

千葉縣香取郡小御門村小御門神社内

編輯兼
發行人 河崎勝正

東京市澁谷區代々木富ヶ谷町一五七〇

印刷者 伊藤藤林造
電話四卷一〇五二番

67
471

終

